

自由コンミュンの樹立とその実践

1930年代に於ける日本アナキズム革命運動

資料 農村青年社運動史

はじめに

もしタイムスイッチのようなものがあって、時計の針を40年あととどりをさせることができれば、1930年代（昭和五年—昭和十年）が、そこには展開されるだろう。

1930年代は、アナキズム運動にとって、貴重な時代であった。それは、その時代において貴重であったばかりではなく、この時代におけるアナキズム運動は、現代的意義を有つがゆえに一層貴重なのである。

貴重であるということは、そうした価値判断を下すひとにとって貴重であるという意味ではなく、多分、アナキズム運動に関心を寄せるところの多数の人たちにとって、この時代に行なわれたアナキズム運動は、客観的にも深い意味を有つものであると信じる。

じつさい、それはふしぎなことであるが、化学繊維とか、エネルギー源とか、建築とか、そうした専門の世界においては、50年という半世紀は、おどろくべき発達を遂げるために、50年前の生産設備は50年後には廃物となるほかはないのである。

しかし、社会運動においては、それは、おどろくほど、思想は長い呼吸をしている。今日から54年もまえの1911年のソヴィエト革命において、アナキストがまなんだ教訓は、54年後の現在においても、いや、54年前のその時代におけるよりも一層の現代性をもって、吾々に活きた教訓をあたえていて、永遠に消えることはない。

バクーニンや、マラテストや、クロボトキンさえ、大ざっぱに言えば50年も前の先輩たちではあるが、それらは神話とはならず、現代に於ても、生きていて、有益なる部分はおそらく、このさき、まだ数百年も思想的生命をもつことは疑いない。

吾々は、本書の表題となっている1930年代における、吾々が次に記述せんとしている吾国に於けるアナキズム革命運動の足跡も、おそらく、社会思想に接近し、アナキズムに興味を有する多数の人々にとって有益であることを信じて疑わない。それは、バクーニンや、マラテストや、クロボトキンが今日の意味をもつように、1930年代のアナキズム運動は現代的意味を有するからである。

1930年代におけるアナキズム革命運動はふたつあった。ひとつは日本無政府共産党（1934—1935）であり、他のひとつは農村青年社運動（1931—1932）であった。このふたつは、革命そのものを行なおうとした以外は、まったく何の共通性もなく、あたかも、そ

れは脊中と腹のように正反対の関係にある。しかし、吾々は日本無政府共産党について殆んど知るところはないので、一応は触れても本書に於ては深くこれに触れることは無い。

要するに、農村青年社運動は、アナキズム運動一般ではなく、自由コンミュンの母体たる「地理区画」が意識的に、各府県につられつつあった。

それがどのような意識と方法でつくられたかを、この書は、できるかぎりの資料を蒐めて、そのひとつひとつを解明せんとするものである。吾々が、いま茲で、全体のあゆみを（それはかなり特有の理念と方法とをもっていたので既成の伝統的アナキズムからかなりな抵抗をあたえられたが）、概括的に説明することは、必ずしも困難ではないが、あらかじめ梗概を記述しないほうが有益ではないかと信ずるので、本書を精読してほしい。

なお、最後に、当時の資料の一切は、旧憲法下の当局に押収せられ、吾々は永久に本書を記述する機会はないであろうと考えていたが、大島英三郎氏、綿引邦農夫氏、吉田多蔵氏、北村孝一氏（示唆をあたえてくれた小松隆二氏）らによって資料のかなりな部分が残存していることが判明し、且つ、すすんで提供していただくことができた結果、本書を完成することができたので、記して好意に厚き謝意を表する。

また、書中においてはすべての敬称を省略した。ご寛容を乞う次第である。

いまひとつ、例えば、資料中、「全国情勢報告」、「信州自由聯合」第二号など欠如し、且つ、当時に於ける各府県同志の運動については、できる限りの努力をつくしたにも拘らず、殆ど連絡を樹立することが不可能であった。どうか本人は勿論、消息を知っていらる同志は、この機会にぜひご連絡を懇請して止まない。

また、本書の記述中、吾々の誤謬があれば、当然、再版時に訂正するので、ご通知賜わりたい。なお巻末後記を諒とせられたい。

昭和47年3月20日

農村青年社運動史刊行会

別所 孝三	星野 準二
伊沢八十吉	南沢袈裟松
大日方盛平	宮崎 晃
鷹野原長義	和佐田芳雄
山田 彰	八木 秋子
吉田 多蔵	

文責 宮崎 晃

目 次

はしがき..... 3

第一章 一九三〇年代と農青運動の特質..... 15

一 涯なき暗黒の時代——連続する恐慌..... 15

二 帝国主義ファシズムの抬頭..... 18

三 農青運動の基盤としての農民とその意識構造..... 19

資料(一) 添田 晋「農民へ訴う」(昭和六年一九三・二月六日発行)第二次黒色戦線社..... 25

第二章 農村——特に信州農村と農民——の窮乏と農

青イズム..... 39

一 アナキズムと農民運動..... 39

二 昭和五年(一九三〇)に於ける農村の窮迫と信州..... 43

三 クロボトキンと異質(?)の出発点..... 55

四 農青イズムと全村運動の展開..... 59

- 資料(二) 八太舟三「現下の問題」(昭和七年一九三二、一月十日発行「自由聯合」第66号)……………62
- 資料(三) 農青社「如何に為すべきか」(昭和六年一九三一、七月発行)……………63
- 資料(四) クロボトキン・麻生義記「サンジカリズムと無政府主義」(昭和二年1927十一月発行)……………71

第三章 サンジカリズム批判と、「自由聯合」の分裂、アナキズム都市労働運動の衰退……………81

- 一 農青イズムの特徴とその成因、スペインとソヴェトのサンジカリズム……………81
- 二 延島英一と、「自由聯合」へのサンジカリズムの浸潤……………83
- 三 八太舟三の「サンジカリズムの検討」と、「自由聯合」の分裂、問題点の発生……………89
- 資料(五) 八太舟三著「サンジカリズムの検討」(昭和二年、一九二七、十月三十日、社会生理研究所発行)……………95
- 資料(六) マラテスタ、幸徳秋水訳「アナキズムとサンジカリズム」(明治四十一年、一九〇八、二月平民新聞)……………101
- 資料(七) 水沼辰夫「関西の一同志へ」(大正十五年、一九二六、十月五日「自由聯合」第四、第五合併号)……………106
- 資料(八) 石川三四郎「サンジカリズムの話」(大正十四年一九二五、八月二十七日、全国印刷工聯合会叢書)……………107

第四章 内部暴力・リンチの発生と、黒聯、自聯の解散を要求した農青の「最近運動の組織並に形態に就ての一提案」……………113

- 一 サンジカリズム排撃と、都市アナキズム労働運動の衰退……………113
- 二 サンジカリズム論争の「自聯」外への波及……………114
- 三 アナキズム戦線に於けるリンチと内部暴力の発生……………119
- 四 結成主義からの離脱と、黒聯、自聯の解散を要求した「最近運動の組織並に形態に就ての一提案」……………121
- 五 「農村青年社事件」と結社加入問題……………123

- 資料(九) 農青社(パンと自由社)「最近運動の組織並に形態に関する一提案」(昭和六年、一九三一、八月一日発行)……………125
- 資料(十) マラテスタ「無政府主義組織論」(昭和四年、一九二九、東京地底社発行)……………131

第五章 自由コンミュン、農青運動の地理区画(自由コンミュンの革命的単位)の樹立と「全国情勢報告」……………140

- 一 個人的テロリズムからの離脱と、コンミュンの問題点……………140
- 二 農青運動の現状批判と「地理区画の樹立」……………143

三 意識的地理区画樹立行動の実際……………147
 四 「農村青年」に於ける地理区画樹立運動の展開……………154

資料(十一) 農青社「全国情勢報告」(昭和六年、一九三二、十一月中旬発行)——現在欠……………164
 資料(一五) 「農村青年」第三、第四、第五号掲載「革命的地理区画の樹立」に関する論稿(P. 154—P. 164)……………154

第六章 所謂、信州暴動計画並びに「吾国に於ける革命の完行について」及び資金活動……………165

一 いわゆる信州暴動計画の新聞報道と「館林手記」……………165
 二 館林手記にあらわれたる信州暴動計画の記述……………167
 三 予審終結決定書にあらわれた信州暴動計画と「わが国における革命の完行について」……………170
 と資金運動……………171
 四 長野地裁判決書における信州暴動計画と、「吾国に於ける革命の完行に就いて」……………171
 五 農青パンフ「吾国に於ける革命の完行に就いて」の配布……………172
 資料(十二) 農青社「吾国に於ける革命の完行について」(昭和六年、一九三二、十月初旬発行)……………177

第七章 地方行脚と農村青年社出版物リスト……………185

一 地方行脚リスト……………185
 二 地方行脚と検挙……………187
 三 農青社出版物リスト……………188

資料(十三) 「協同組合はいいか悪いか」(昭和六年、一九三二、八月中旬、茨城相互扶助社、農青社発行)……………198

資料(十四) 「日本村治派同盟を排撃せよ」(昭和六年、一九三二、十一月中旬、農青社発行)……………203

資料(十五) 革命的地理区画の樹立(第五章掲出)……………208

農村青年第三号、第四号、五号(15頁以下)……………209

資料(十六) 農青社「無政府主義研究」第一号(昭和七年、一九三二、一月発行)……………219

資料(十七) 第三次「黒色戦線」第一号(昭和六年、一九三二、九月一日発行)……………231

資料(十八) 第三次「黒色戦線」第二号(昭和七年、一九三二、一月発行)……………244

資料(十九) 「信州自由聯合」第一号(昭和七年、一九三二、四月二十日発行)……………261

資料(二〇) 「黒色農民新聞」昭和七年、一九三二、二月発行)……………268

第八章 農村青年社事件の概要……………273

一 一九三〇年代におけるアナキズム革命運動……………273

二 木下茂「ぼくはこう考える」―追記―	274
三 農村青年社の構成と崩壊	277
四 農村青年社の成立過程	278
五 農青運動検査の特質	279
六 農村青年社の解散について	281
七 「解散声明書」の内容について	288
資料(二十一) 「農村青年社解散声明書」鈴木靖之(昭和七年、一九三二、九月二 十七日配布)	284

第九章 信州その他の府県に於ける農青アナキズム 革命運動

一 総論	290
二 長野県(伊那、富県)に於ける農青アナキズム革命運動	291
三 長野県(北佐久) "	296
四 長野県(諏訪、松本) "	300
五 長野県(大門、小県) "	303
六 山梨県に於ける "	306
七 山形県に於ける "	308
八 静岡県に於ける "	309
九 福島県に於ける "	310

十 栃木県に於ける	312
十一 埼玉県に於ける	312
十二 愛知県に於ける	313
十三 関西に於ける	314
十四 茨城県に於ける	314
十五 新潟県に於ける	315
十六 千葉県に於ける	315
十七 東京に於ける農青関係者の検査	316
十八 神奈川県に於ける農青アナキズム革命運動	316